

報告事項

平成 25 年度事業報告

I. 事業の経過およびその成果

1. 社員総会

公益社団法人になって 3 回目の第 66 回定時社員総会を平成 25 年 5 月 23 日（木）に化学会館 7 階ホールで開催。社員総数 240 名のうち 203 名（出席者 22 名、有効委任状 181 名）が出席して会が成立。平成 24 年度事業報告、平成 24 年度会計報告、役員選任、及び定款変更に関して決議した。

2. 役員会等

1) 理事会

平成 25 年度は、第 614 回（5/9）、第 615 回（5/23）、第 616 回（7/17）、第 617 回（10/29）、第 618 回（2/6）の計 5 回開催するとともに、メール審議によるみなし理事会を 1 回行った。

①代表理事及び業務執行理事の選任

第 66 回定時社員総会（5/23）後の第 615 回理事会で、代表理事・筆頭副会長として尾嶋正治氏を、代表理事・常務理事として川島信之氏を選出した。尚、代表理事・会長の玉尾皓平氏は留任である。また、業務執行理事・副会長としては、留任である原田 明氏、蜷川洋一氏に加え、新たに近藤忠夫氏、中條善樹氏、西原 寛氏を選出した。

②公益法人としての内閣府への定期提出書類の提出

平成 24 年度事業報告、平成 24 年度決算に係る資料について、第 614 回理事会で承認し、第 66 回定時社員総会で決議後、5 月末に内閣府へ提出した。また、平成 25 年度理事について、第 614 回理事会で承認、第 66 回定時社員総会で決議後、第 615 回理事会で代表理事、業務執行理事の選任を行って、内閣府へ役員の変更届を提出した。

平成 26 年度事業計画及び予算について、第 618 回理事会で承認し、2 月末に内閣府へ提出した。

③平成 26 年度事業計画、予算案

平成 26 年度予算案については、第 616 回理事会で、原則として「損益ベースの考え方」で収支均衡を目指すという予算策定方針を決めて予算策定を行い、第 618 回理事会で最終案の承認を行った。平成 26 年度予算は、損益ベースで 3,340 万円の赤字となるが、パッケム事業の余剰金、ジャーナル関連・戦略的支出、消費税の影響について、財政健全化の観点から別扱いとするとほぼ収支均衡となる。

平成 26 年度事業計画については、第 618 回理事会で承認された。

予算案、事業計画とも公益社団法人下では、社員総会の決議は必要なく、理事会承認で発効する。

④基本活動方針とその活動

定款に基づく化学会の中長期基本戦略、外部環境の変化、平成 25 年度の基本活動方針の達成状況と残された課題を整理して作成された平成 26 年度基本活動方針が第 618 回理事会で承認された。

- I. 最重要成果が発表され、キーパーソンが集まる研究集会と論文誌：①年会の英語化・国際化、②国際的ビジビリティと収益性を意識したジャーナル戦略の実行
 - II. 産業界が期待する産学(産産)連携推進活動：①産学交流委員会活動の更なる活性化、②CSJ 化学フェスタの持続的な将来戦略構築、③日化協および他機関連携の強化
 - III. 人材育成・化学普及活動：①支部活動の重点化と活性化、②教育・普及活動の強化(夢化学 21、化学の日)
 - IV. アジア諸国化学会を中心とする国際連携強化：①国際機関との協調、二国間連携、②当会が主体となる国際会議(PACIFICHEM2015、17ACC)の準備
 - V. 中長期を見据えた組織基盤の強化：①公益社団法人として円滑な運営と中長期戦略の改訂、②全組織をあげた会員増強。③財務体質の健全化、収益・コスト意識の徹底、④事務局の効率化、人材育成、国際化対応、⑤広報・情報発信力の強化
- ⑤平成 26、27 年度役員候補者について
- 平成 26、27 年度会長候補者については、規程に従って会員投票を行った結果、信任され、会長最終候補者として、第 614 回理事会で承認された。また、平成 26、27 年度理事候補者、監事候補者については、1/23 の役員選考委員会を経て、第 618 回理事会で承認され、5/26 の第 67 回定時社員総会に諮られることになった。
- ⑥重要な使用人としての支部長、部会長の承認
- 第 618 回理事会において、平成 26 年度の支部長として、吉川信一氏、末永智一氏、秋山隆彦氏、角田範義氏、辻 康之氏、山本陽介氏、喜多村二雄氏を選任した。また、部会長として、荒殿 誠氏、船津公人氏、鍋島達弥氏、高木昌宏氏、坂本昌巳氏を選任した。
- ⑦各賞選考、フェロー選考、化学遺産認定
- 平成 25 年度の各賞候補者、フェロー候補者、化学遺産候補については、規則に従って、選考され、平成 25 年度第 1 回みなし理事会で承認された。また、その後、学会賞受賞者 1 名より受賞辞退の申し出があり、第 618 回理事会で辞退を承認した。
- ⑧科研費ベースのジャーナル戦略の実行
- 化学会の論文誌である BCSJ と CL の国際情報発信力を強化するため、平成 25 年度から 5 年間の科研費に応募したところ、採択された。時任、塩谷両編集委員長を中心としたワーキングチームで、編集・出版体制の戦略的再構築、グローバル著者マーケティング(分野別の論文カタログ、マーケティング用パンフレットの作成、著者研究者への投稿依頼など)などを実行した。
- ⑨化学オリンピック支援委員会の化学会への移管
- これまで日本化学工業協会、日本科学技術振興財団及び日本化学会の 3 者で運営されていた化学オリンピック支援委員会を化学会の理事会直下の委員会として移管することが、第 614 回理事会で承認され、それに伴う規程類を整備した。
- ⑩パッケムの法人化
- パッケムの法人化及び本会が構成 3 学会の一つとして参加することに関し、第 617 回理事会で審議し、承認した。
- ⑪吉野彰研究助成事業

旭化成の吉野彰氏の寄附金を原資とした吉野彰研究助成を設立し、本会の産学連携部門の事業として開始することを、平成 25 年度第 1 回みなし理事会で承認し、それに関する規程類を整備した。

⑫東日本大震災被災者支援事業

東日本大震災被災者支援事業に関しては、本会資金と寄附金を合わせた約 1,740 万円を原資として実施してきたが、平成 25 年度までに大部分が終了したため、東日本大震災被災者支援委員会を平成 25 年度で解散すること、残金は支援事業に使用することとし、理事会管理のもとに実施することが第 618 回理事会で承認された。

⑬規程類の改訂

会議の性格を明確にするため、運営会議規程及び戦略企画委員会規程を改訂し、第 617 回理事会で承認された。

⑭国際交流関係

ナカニプライズ及びアジア化学会の FACS Awards の候補者が第 617 回理事会で承認された。また、英国王立化学会の PCCP 賞の候補者が第 618 回理事会で承認された。

⑮会員関連

海外公共会員の 2014 年度会費について、第 617 回理事会で承認された。また、理事会承認事項である会員の入会の承認に関し、適時、理事会に報告することを条件に、常務理事に委任することが、第 618 回理事会で承認された。

⑯事務局関連

平成 24 年度における職員等の退職に伴い、新規職員 2 名、及び参与 1 名の採用が、第 614 回及び第 617 回理事会で承認された。また、常務理事の報酬額を、第 617 回理事会で、役員報酬規程の範囲内で決定した。

2) 顧問会

10 月 29 日に 9 名の顧問（歴代会長）を招いて開催。顧問各位から貴重なご意見を伺った。

3) 相談役会

平成 25 年度も相談役会は開催しなかったが、現役の社長、会長が出席する 5/17 の日化協の理事会、5/29 の日化協理事懇親会、新年の化学合同賀詞交歓会などの場で、化学会幹部との意見交換を行った。このような化学企業トップとの意見交換の場を定例化していく。

4) 支部長・部会長会

平成 25 年度は、3/22、7/17、2/6 の 3 回開催した。支部・部会に関しては、特に、会員増強、CSJ 化学フェスタ、教育・普及活動（夢化学 21、化学の日）について、協力の要請を行った。また、年会の英語化・国際化についての意見交換を行った。支部の事業計画及び予算については、例年、予算と実績の乖離が大きい傾向にあるため、これの是正、及び予算及び決算での収支均衡を依頼した。

3. 運営会議関係

1) 運営会議

今年度は4/17、6/28、9/20、12/10の計4回開催。主に理事会における審議案件について予備的検討を行うとともに、会の重要事項について審議を行っている。

また、各委員会委員長、ディビジョン主査の承認を行った。

2) 戦略企画委員会

平成25年度は、4/17(水)、6/28(金)、9/20(金)、12/10(火)の計4回開催した。

① 科研費ベースのジャーナル戦略の実行

化学会で編集・出版を行っている欧文誌、速報誌を、自助努力により世界の一級学術誌と匹敵出来る学術誌とするための戦略を策定し、科研費申請を行ったところ、平成25年度から5年間の事業(国際情報発信力強化)として採択され、実行に移している。化学会からも戦略的支出を行い、事業を推進する。両編集委員長を中心に、編集企画(兼マーケティング)マネージャーの選任を行い、作成したパンフレット、カタログを用いた積極的な宣伝、個別の執筆依頼など戦略的な活動を実施している。

② 年会のあり方

年会のあり方については、会場確保と英語化・国際化の2つの観点で、検討を行った。会場確保に関しては、学術研究活性化委員会に検討を付託したところ、発表件数・参加者数は減少させないで、口頭発表の件数を制限し、ポスターに移行させる方向性の答申があった。関東及び関西の大学の教室情報の収集を行っている。

英語化・国際化については、渡辺芳人名大副総長を主査とするワーキングチームで検討を行い、基本的な方向は確認されたものの、いくつかの懸念点も示されており、広く意見交換を行って、具体化を図っていく。第94春季年会では受賞講演の英語化、B講演の英語講演推奨を呼びかけた。

③ 会員増強

減少が続いている会員の増強、特に、減少が著しい法人会員、法人所属の個人正会員の増強について、議論を行った。会員増強は、事務局会員Gや会員委員会のみでの活動では困難であり、方策の具体化は関連部門にお願いする方向が示された。

法人会員増強については、玉尾会長、榊原戦略企画委員会委員長連名で、企業のトップ宛てに新入会、再入会、増口の依頼を行い、効果が上がりつつある。個人正会員の増強については、会員委員会で、「お好きな元素記号入りマグカップ」を新入会員及び紹介者に贈呈するキャンペーンを行うことになった。産学連携部門等と連携して、推進していく。

④ 化学会のあり方

平成26年度は、平成21年に策定した化学会の中長期基本戦略の中間年であり、中長期基本戦略の見直しを行うこととし、その検討を行うにあたり、政策提言機能、原発廃止措置、事務局のあり方、化学会館の補修・維持について、問題点の指摘を行った。

論文数減少問題、日本版NIH、原発廃止措置、政策提言機能強化についてのシンポジウムなど、具体的な問題についても議論を行った。

⑤ 国際連携の実質化

パッケムの法人化、IUPAC、FACS、CS3、年会での国際交流企画、日欧イノベーションシンポジウムなど、国際連携の実質化に向けた活動に関し、議論した。

3) 東日本大震災被災者支援委員会

化学会からの支出1,400万円と、会員等よりの寄附金約340万円を合わせた、約1,740万円を支援事業の資金として、事業活動を行った。申請に基づく支援事業の選定は、委員会で十分に審議して実施の可否を決定。これまでに、30件の事業の実施を決めた。支援委員会は、平成25年度末で解散し、あとの事業については理事会管理で実施する。

4) 広報委員会

広報委員会は日本化学会および日本化学会の活動について、情報発信力の強化を進めている。その一貫として2013年2月6日(水)に日本化学会ホームページを大幅リニューアルした。引き続き迅速、タイムリーに情報の発信、見やすさの改善、英文ホームページ改革などに取り組んでいる。

5) 倫理委員会

今年度は日本化学会会員行動規範』および『行動の指針』に係わる問題が特になく、倫理委員会は開催しなかった。学協会の連合体である技術倫理協議会に委員を派遣した。

6) 論説委員会

論説委員会(委員長:村井眞二)は日本化学会が専門家集団として、社会に向けてより積極的に発言するため、化学、化学技術関連の時事テーマを随時とりあげ、それに対する見解を機関誌「化学と工業」および化学会ホームページに「論説」として掲載し、発信している。

25年度には論説委員会を2回開催し、執筆を依頼するテーマについて論議し、論説委員8名、ゲスト論説委員に順次執筆を依頼、掲載した。

4. 会務部門

1) 会務部門会議

平成25年度は、会務部門会議を3回開催した。会議では、主に、①規程、規則等の新設あるいは改訂、②日本化学会フェローの選考、③各賞選考委員会からの要望事項の対応、④消費税アップへの対応、⑤海外会員の会費、⑥会館管理・補修などについて議論した。以下にその概要を記した。

① 規程、規則等の新設あるいは改訂

化学オリンピック支援委員会の化学会移管に伴う規程類の新設・改訂、寄附金受領規程、運営会議規程並びに戦略企画委員会規程の改訂について審議し、理事会に諮った。

ディビジョン運営委員会から要望のあった進歩賞のディビジョン推薦枠の増加について審議し、学術賞・進歩賞選考委員会規則の改訂を行った。

② 日本化学会フェローの選考

平成25年度日本化学会フェローとして、次の各氏を選考した。各氏は理事会で承認され、第94春季年会会場(名古屋大学東山キャンパス)で認定式が執り行われた。

長谷川正(東京学芸大) 福田豊(お茶の水女子大名誉) 下井守(東大名誉)、
渡辺正(東京理科大) 黒河伸二(熊本県立大) 日吉芳朗
佐々木政子(東海大名誉) 岩本振武(東大名誉) 千葉泰久(宇部興産)

③ 各賞選考委員会からの要望事項の対応

各賞選考委員会からのいくつかの要望について審議した。これらに関し、関連する規程類

に反映させて理事会に諮ることを目指し、ワーキングチームを組織して検討を行うことになった。

④ 消費税アップへの対応

消費税アップの化学会収支への影響を試算し、対応について議論を行った。その結果、経費削減等の自助努力を極力行うが、会費で吸収することも考慮し、他の学協会の動きも見ながら、慎重に検討を行うことになった。

⑤ 海外会員の会費

海外会員の会費の決め方に関し、規程類に不備があるため、ワーキングチームで検討することになった。また、会員委員会から答申のあった海外学生会員の会費改訂については、会務部門で承認し、規則に反映させた。

⑥ 会館管理・補修

化学会館は築 22 年を経過し、不具合が目立ってきており、補修計画を練り直す必要がある。平成 26 年度予算で、調査費を計上し、調査を行う。

2) 会員委員会

今年度は委員会を 4 回開催した。化学会の会員数は残念ながら減少が続いており、会員増強のための方策として、新入会記念品として、お好きな元素記号入りマグカップを新入会の個人正会員と紹介者に贈呈するキャンペーンを企画し、第 94 春季年会会場で広報活動を行った。法人会員増強については、技術研究組合をターゲットに入会活動を行うことを決め、実行中である。

また、海外会員の会費の決め方、海外法人入会の対応、海外学生会員会費の改訂、消費税アップに伴う会費の考え方、代表正会員の活用などについて議論した。

第 93 春季年会会場（立命館大学びわこ・くさつキャンパス）で、代表正会員会議を開催した。

3) 役員候補者選考委員会

役員候補者選考委員会において、平成 26 年度新任理事候補者 12 名と新任監事候補者 2 名を選出し、理事会に答申した。

4) 各賞選考委員会

各賞選考委員会において、平成 25 年度受賞候補者を選出し、理事会に答申した。理事会で承認後、第 94 春季年会会場（名古屋大学東山キャンパス）で表彰式が執り行われた。

【日本化学会賞】 5 件

赤坂 健(筑波大生命領域セ) 榊 茂好(京大福井研究セ) 高井和彦(岡山大院自然科学)
西出宏之(早大理工) 水野哲孝(東大院工)

【学術賞】 10 件

伊藤 肇(北大院工) 生越専介(阪大院工) 梶原康宏(阪大院理)
櫻井英博(分子研) 佐田和己(北大院理) 島本啓子(サトリー-生命科学財団)
民秋 均(立命館大生命科学) 長谷川靖哉(北大院工) 原 亨和(東工大応用セラ研)
藤井正明(東工大資源化学研)

【進歩賞】 10 件

猪熊泰英(東大院工) 大宮寛久(北大院理) 樫田 啓(名大院工)
深澤愛子(名大院理) 古川修平(京大 iCeMS) 堀毛悟史(京大院工)

前田和彦(東工大院理工) 安田琢磨(九大院工) 山内悠輔(物質・材料研究機構)
吉戒直彦(シカゴ・南陽理工大)

【女性化学者奨励賞】 2件

内田さやか(東大院総合文化) 牧浦理恵(阪府大 21世紀科学研究機構)

【化学技術賞】 3件

- ・鈴木賢, 山口辰男(旭化成ケミカルズ)
- ・上田賢一, 中川浩一, 浅野英雄, 伊藤正自, 中西秀高(日本触媒)
- ・石田美織, 志賀靖, 田中由紀, 佐々木智子, 西澤理(三菱化学科学技術研究センター、三菱化学)

【技術進歩賞】 2件

篠畑雅亮(旭化成ケミカルズ) 織田政紀(花王)

【化学教育賞】 3件

内山一美(首都大東京院都市環境) 鎌田正裕(東京学芸大) 米澤宣行(東京農工大院工)

【化学教育有功賞】 5件

河合孝恵(富山高専) 西田哲也(大谷中学・高校) 宮本一弘(開成中学・高校)
肆矢浩一(國學院高校) 米沢剛至(仁川学院高校)

【化学技術有功賞】 2件

太田隆夫(北大電子研) 岡田則夫(国立天文台)

【功労賞】 3件

渡辺 正(東京理科大) 米澤宣行(東京農工大院工) 伊藤真人(創価大)

5. 研究交流部門

平成 25 年度は部門会議の開催なし。

1) 学術研究活性化委員会

平成 25 年度は会議を 1 回開催し、以下を検討した。

① 第二次先端ウォッチング調査

『第二次先端ウォッチング調査』は、複数の化学関連領域にインパクトを与え、新領域への発展が期待されるテーマについて調査を行っている。平成 25 年度は「社会の持続的発展のための分子技術」(提案者: 加藤隆史委員) を承認し報告書を作成した。第 94 春季年会でイブニングセッションが実施される。

② 中長期テーマシンポジウム

中・長期視点から特別企画を継続的に春季年会実行委員会に提案しており、第 94 春季年会では以下 6 件のシンポジウムが実施される。

「ケミカルバイオロジーの新展開-有機化学から発信するライフサイエンス新戦略 II 博士課程の学生・若手研究者はロールモデルを探せ」「複雑系のための分子科学-理論研究によるアプローチ」「エレクトロニクスの新パラダイム-二次元機能性薄膜を基軸とする超低消費電力デバイスの開発-」「元素戦略: 物質開発に基づく材料科学のジャンプアップ」「太陽光エネルギー変換最前線-人工光合成と太陽電池-」「配位シナジー: 柔軟な構造・電子状態による高次機能創発」

③ アジア国際シンポジウム

春季年会の活性化を目的としてアジア地域の若手研究者を招聘して国際シンポジウムを開催しており、第 94 春季年会では 8 ディビジョン(光化学、理論化学・情報化学・計算化学、無機化学、錯体化学・有機金属化学、分析化学、ナノテク・材料化学、コロイド・界面化学、有機結晶) による 8 つのシンポジウムで 16 名を招聘して開催する。

④年会の在り方について

昨年度、春季年会の安定した会場校確保のために、英語化を含む今後の年会の在り方について検討を行い中間答申を行った。本件は現在戦略企画委員会の預かりとし、英語化を中心に検討中である。

2) ディビジョン運営委員会〔委員長：加藤隆史（東大院工）〕

平成 25 年度は会議を 2 回開催。第 94 春季年会でのアジア国際シンポジウム開催ディビジョンならびに進歩賞のディビジョン推薦枠増加について検討した。平成 26 年度よりディビジョンからの進歩賞推薦枠は 2 件に増加した。現在約 22,000 名の会員が 21 ディビジョンに登録している。

3) 春季年会実行委員会

①第 93 春季年会(2013)

3 月 22～25 日に立命館大学びわこ・くさつキャンパスにて実施。総講演件数 6,017 件、参加登録者 8,114 名。ATP の一般講演を ATP ポスターに一本化した。また、優秀講演賞(産業)の審査対象を ATP ポスターに変更した。

② 第 94 春季年会(2014)

平成 26 年 3 月 27～30 日に名古屋大学東山キャンパスにて実施予定。総講演件数 5,917 件、参加登録者未定。春季年会の関東開催の特例として名古屋大学にて実施予定。また、講演申込、参加登録のサイトを一本化した(年会マイページ)。

4) 部会・研究会・新領域研究グループ

① 研究会：「フロンティア生命化学研究会」、「低次元系光機能材料」の 2 つの研究会がシンポジウム等を実施した。

② 新領域研究グループ：「低次元無機-有機複合系の光化学」、「金属と分子集合」、「ナノスケール分子デバイス」、「エキゾチック自己組織化材料」、「有機合成を起点とするものづくり戦略」、「液晶相高密度エネルギーナノ反応場」、「分子統計化学」の開拓 ～溶液とソフトマテリアルとの橋渡し」の 7 研究グループがシンポジウム等を実施した。

5) 国際交流委員会

① 日中若手化学者フォーラム

2009 年に締結された日中国際協力協定に基づき、第 3 回日中若手化学者フォーラムを 2013 年 3 月 24 日、第 93 春季年会会期中(立命館大学、滋賀県草津市)に開催した。テーマ：“Effective Utilization of Elements and its Chemical Applications”、日本側のリーダーは辻 勇人(東大)、共 6 名ならびに玉尾 皓平会長、川島常務理事も参加。中国側のリーダー Dr. Sanzhong Luo (Chinese Academy of Science)共 中国から 8 名が参加した。

② 日英シンポジウム

2011 年は東日本大震災の為、開催が見送られたが、2013 年、当時と同じテーマ：“Chemical Biology”として第 4 回日英シンポジウムを 3 月 24 日、第 93 春季年会会期中(立命館大学、滋賀県草津市)に開催した。日本側のリーダーは菊地 和也(阪大)、共 5 名ならびに玉尾 皓平会長、川島常務理事も参加。英国側の責任者は RSC の Sarah Thomas とし、英国から Rober Parker 常務理事と講演者 4 名が参加した。

③ 中西シンポジウム

1996年に日米両化学会で締結された二国間協定に基づき実施。コロンビア大学の中西香爾センテニアル教授の名を冠した「中西シンポジウム」が設置され、有機化学、生物有機化学で顕著な業績をあげ、国際的協力研究を推進した研究者を日米化学会が交互に選考し、日米化学会の名を刻した「中西メダル」を授与している。平成24年度はACSが受賞者の選考を行いDr. Arthur G. Palmer, III (Columbia University)が受賞者に選定された。なお、玉尾皓平会長がACSのAnnual Meeting会期中の表彰式に授与者として出席した。

④ CS3 (Chemical Science and Societies Summit)

独、英、中、米、日の化学会およびFunding Agencyが連携して、喫緊のテーマに絞り、世界の第一線の化学者を集め会合を行なう。第5回目の今回は9月16～19日に日本(成田)で開催した。テーマは“Efficient Utilization of Elements”。日本からはリーダー：北川 宏(京大)、メンバー：蛇川 育稔(トヨタ自動車(株))、野崎 京子(東大)、澤本 光男(京大)、中山 智弘(JST)、原田 幸明(NIMS)、学振代表：塩谷光彦(東京大学)、学会代表：川島信之(化学会常務理事)が参加した。討議結果は白書として取り纏める予定。

⑤ FACS (アジア化学会連合)関係

FACS総会とACC(アジア化学会議)は2年に一度、西暦奇数年に開催される。2013年は8月19日に第17回総会が、また8月19日～23日に第15回ACCがシンガポールにおいて開催された。

今回のFACS総会で、本会は17ACC(第17回アジア化学会議、2017年)を日本に招致すべく、立候補し、投票の結果日本(札幌)招致が決定した。

⑥ IUPAC (国際純正・応用化学連合)関係

IUPACは、2年に1度、総会(General Assembly)と世界化学会議(World Chemistry Congress)を開催している。今年度は第47回IUPAC総会(2013年8月8日～15日)と第44回IUPAC世界化学会議(2013年8月11日～16日)が、トルコ共和国イスタンブールにおいて開催された。“2013 Distinguished Women in Chemistry/Chemical Engineering”はIUPACが2011年に世界化学年を記念し、世界の優れた女性化学者を顕彰する賞として定めた賞である。第2回目となる今年度は、栗原和枝東北大学教授ほか11名の世界の女性研究者が受賞した。また役員改選では山内薫東大教授(Division IのPresident)が選出された。次回は2015年8月6日15日に総会とコンGRESSが釜山(韓国)で開催予定。異会長が2013年12月末にて退任し、2014～2015年はImmediate Past Presidentとして活動予定。

なお、IUPAC賛助会員委員会を11月19日に開催。IUPACの各ディビジョン・委員会の日本委員に出席願ひ、活動報告を行った。今年度でCOCIのTitular Memberを任期満了にて退任する石田 英之委員長(阪大)は、本委員会内規に従い委員長職も退き、後任として東レリサーチセンターの石切山一彦氏が引き継ぐこととなった。

⑦ 環太平洋国際化学会議(PACIFICHEM)

PACIFICHEM 2015 第2回国内実行委員会を2013年3月25日、第93春季年会会期中(立命館大学、滋賀県草津市)において開催した。

2013年1月1日～4月1日までの第一ラウンド シンポジウム募集では312件の企画提案があった。6月11日から東京で開催された第2回国際組織委員会で行われた採否審査で262件が採択された。(参考：前回のPACIFICHEM 2010の全シンポジウム数は235件)

なお2013年12月1日～2014年3月1日までの第二ラウンド シンポジウム募集で提案される企画について2014年6月に開催予定の第3回国際組織委員会(ニュージーランド)で審議される予定となっている。

⑧ 命名法専門委員会

委員会を開催し、化合物命名法の増し刷りに伴う改定について検討した。また、会員および一般の方々からの命名法および関連する事柄に関する質問や指摘に対応した。

⑨ 原子量専門委員会

2013年版の「原子量表」を化工誌・化教誌4月号に掲載した。また、2014年度版の「原子量表」を作成した。平成26年化工誌・化教誌4月号に掲載予定。

⑩ 単位・記号専門委員会

「化学で使われる量・単位・記号」2013年版を化工誌・化教誌4月号に掲載した。また、2014年版の更新を行った。平成26年化工誌・化教誌4月号に掲載予定。

⑪ 主催国際会議

本会主催の国際会議 第26回 International Conference on Organometallic Chemistry (ICOMC 2014)が7月13日～18日に札幌で開催予定。高橋保委員長(北大)が日本学術会議や札幌市、北海道、IUPACなどの協力を得て開催準備を進めている。

⑫ PCCP賞

イギリス王立化学会から本会に対する協力要請に基づき、2007年より Royal Society of Chemistry, PCCP (Physical Chemistry Chemical Physics) and Faraday Discussion の“PCCP Prize”受賞候補者選定について、各ディビジョンから推薦してもらい、3名の若手研究者を選定した。第94春季年会会場において授賞式を行う。なお今年度の受賞者は下記の通り。

- 都 英次郎 氏 (独)産業技術総合研究所 ナノチューブ'応用研究センター高度機能CNTチーム主任研究員
- 齊藤 尚平 氏 名古屋大学大学院理学研究科物質科学専攻助教
- 佐藤 弘志 氏 京都大学 物質-細胞統合システム拠点北川グループ助教

6) 化学遺産委員会

①化学・化学技術の分野で大きな業績を残された諸先達にインタビューを行い、それを映像と音声および冊子体で後世に残す事業[化学語り部・オーラルヒストリー]

平成25年度は辻 二郎先生、進藤昭男氏および安井昭夫氏のインタビューを行った。

②化学・化学技術史に関する一般市民への啓発事業

第8回化学遺産市民公開講座を第94春季年会会場において、第5回認定の内容をテーマに実施する予定。(平成26年3月29日、名古屋大学東山キャンパス)

③「化学遺産認定制度」の実施

第5回化学遺産として以下の6件を認定した。平成26年3月に記者会見を行い紹介するほか、第94春季年会における表彰式で認定証を贈呈する予定。

○化学認定遺産 第023号『日本の近代化学の礎を築いた櫻井錠二に関する資料』

○化学認定遺産 第024号『エフェドリンの発見および女子教育に貢献のあった長井長義関連資料』

○化学認定遺産 第025号『旧第五高等学校化学実験場および旧第四高等学校物理化学教室』

○化学認定遺産 第026号『化学技術者の先駆け 宇都宮三郎資料』

○化学認定遺産 第027号『日本のプラスチック産業の発展を支えた Iso ma 射出成形機及び金型』

○化学認定遺産 第028号『日本初のアルミニウム生産の工業化に関わる資料』

7) 男女共同参画推進委員会

平成24年度から新設された女性化学者奨励賞の候補者の選出を行った。第14回シンポジ

ウム “For Future Leaders in Chemistry for Science, for Society and in the World!”
「社会にはばたく、世界にはばたく、あなたがリーダーになるために」を第 94 春季年会会場（名古屋大学東山キャンパス）で開催した。男女共同参画学協会連絡会に委員を派遣して活動を行った。また、男女共同参画学協会連絡会から各省庁へ要望書を提案していく予定。

8) 環境・安全推進委員会

平成 25 年度は 2 つの小委員会で以下の講演会を実施。

① 教育小委員会

○環境教育講演会（25. 8. 19）日本が誇る希少資源～環境に配慮した元素資源の利用～
参加者 58 名

② 防災小委員会

○化学安全スクーリング（25. 8. 5-6）化学実験室における安全管理指導者の養成
参加者 50 名

また、関連組織との連携として第 26 回環境工学連合講演会（25. 4. 18-19）を幹事学会として開催し、22 件の講演と 185 名の参加を得た。

加えて、安全工学シンポジウム 2014 への委員派遣を行なった。

6. 学術情報部門

1) 学術情報部門会議

平成 25 年度は学術情報部門会議を 1 回開催し、①ジャーナル戦略に係る科研費の採択の報告と実行計画、②2014 年海外公共会員会費の値上げ、③速報誌 Highlight Review 論文のオープンアクセス化、④平成 26 年度学術情報部門事業計画および予算案などについて報告および議論があった。

2) 化工誌編集委員会

例年通り 2 回開催し、企画のアイデアや編集方針を打ち合わせた。

①化工誌編集幹事会

委員会開催回数：編集委員会 2 回、幹事会 12 回。

発行状況：総頁数 1,039 頁 総発行部数：313,900 部

「化学と工業」誌の内容の充実を図るべく、幹事会を毎月開催し、各号の企画案および Overview について討議した。

②広告小委員会

委員会開催回数：6 回

新規広告代理店スプラウト起用の効果もあり、広告料の減少傾向から対前年比若干のプラスに転じた。明報社とスプラウトの 2 社体制で従来の「企業情報」「大学院入試案内」並びにタイアップ広告企画 Gallery などを行った。また、新規事業として「企業情報」のウェブ版「ケミカルリクルート」をスプラウトとの協業により 2014 年 1 月にオープンした。

3) 欧文誌編集委員会

委員会開催回数：本委員会 1 回、幹事会 12 回

発行状況：論文掲載 165 件、総頁数 1,824 頁、総発行部数：21,120 部

科研費補助金（研究成果公開促進費：国際情報発信強化）「日本化学会発行論文誌の国際

競争力強化[平成 25～29 年度]」の交付決定に伴いジャーナル戦略の 1 年目の取組みを実施した。

- ・国際化の観点から Senior Editor を新規に 7 名配置 (アジア 2・欧 1・米 1・日 3 名) した。
- ・引用を増やす取組として Accounts 論文数の増加を目指し戦略的な執筆依頼に注力した。
- ・Award Accounts 論文の未脱稿著者に対しての投稿催促を継続的に実施した。
- ・欧文誌ジャーナルウェブサイト を 2014 年 3 月に 7 年ぶりにリニューアルし、情報発信力を強化した。
- ・速報誌と共同で最近の注目論文情報をキーワード別にまとめたカタログを 2 回発行し (2013 年 7 月、2104 年 3 月)、国際会議、春季年会等で配布・宣伝した。

4) 速報誌編集委員会

委員会開催回数 : 本委員会 2 回、幹事会 4 回

発行状況 : 論文掲載 516 件、総頁数 1,876 頁、総発行部数 : 24,300 部

- ・国際化の観点から Senior Editor を新規に 7 名配置 (アジア 1・欧 2・米 1・日 3 名) した。
- ・引用を増やす取組として、Highlight Review 論文数の増加を目指し戦略的な執筆依頼に注力した。
- ・2014 年 1 号から冊子体のリニューアル (表紙 Graphical Abstract 採用等) を実施した。
- ・速報誌ジャーナルウェブサイト を 2014 年 3 月に 7 年ぶりにリニューアルし、情報発信力を強化した。
- ・欧文誌と共同で最近の注目論文情報をキーワード別にまとめたカタログを 2 回発行し (2013 年 7 月、2104 年 3 月)、国際会議、春季年会等で配布・宣伝した。
- ・向山 Aldo140 周年記念の論文を掲載した。

7. 産学連携部門

産学連携部門は戦略企画委員会から化学フェスタ実行委員会が異動、産学交流委員会と化学フェスタ実行委員会の 2 委員会となった。産学交流委員会には ATP 企画小委員会、教育企画小委員会、懇話会企画小委員会、人材交流小委員会の 4 委員会がある。

1) 産学交流委員会

産学交流委員会は ATP 企画小委員会、教育企画小委員会、懇話会企画小委員会、人材交流小委員会の 4 委員会で構成されている。611 理事会および 612 理事会で産学連携部門および産学交流委員会の組織改革を実施、目的・機能別に再編した。

①ATP 企画小委員会

春季年会における産官学の学術交流および連携強化のための事業の企画・実施および優秀講演賞 (産業) の審査・選考を任務とする。

春季年会実行委員会では、従来の産学連携小委員会を「ATP 小委員会」に名称を変更し、産学交流委員会が委員を派遣し、春季年会実行委員会の下で ATP の企画・実施を行う。

立命館大学びわこ・くさつキャンパスで開催された第 93 春季年会では ATP 改革の一環として、C 講演の廃止、優秀講演賞 (産業) を ATP ポスターで審査、授与することに改訂した。

②教育企画小委員会

産業界所属の研究者・技術者、および産業界を目指す学生の教育に関わる事業の企画・実施を役割とする委員会で、化学技術者の基礎化学力の向上を目的とする「化学技術基礎講座」を

企画・実施している。

③懇話会企画小委員会

産官学の学術交流の場としての R&D 懇話会運営、および産産・産学の交流のための事業の企画・実施している。R&D 懇話会でも改革に取り組み、懇話会開催数の増加、企画の充実を図り、さらに新規企画立案を計画している。

④人材交流小委員会

産学の人材交流に関わる事業の企画・実施を担当する。組織再編成のなかで従来、教育企画小委員会にあった「就職交流会」、産学人材交流小委員会（廃止）にあった博士セミナー、化学技術者教育小委員会（廃止）にあった JABEE、日本工学会、日本工学教育協会など外部組織による化学技術者教育など人材教育に関わる活動に取り組んでいる。

2) 化学フェスタ実行委員会

化学フェスタ実行委員会は戦略企画委員会の組織としてスタートしたが、産学連携活動として統一的マネジメント体制を構築するため、産学連携部門に移管（612 理事会で産学連携部門規定の改訂を承認）、新たに産学連携部門化学フェスタ実行委員会となった。

第 3 回 CSJ 化学フェスタは多田啓司委員長（旭化成・留任）、加藤隆史委員長（東京大学・新任）の両委員長体制で、2013 年 10 月 21 日（月）～23 日（水）の 3 日間、東京・江戸川区のタワーホール船堀で開催した。参加者は目標を上回る 2227 名、学生ポスターも全国の大学から応募があり、目標を大幅に上回る 943 件となった。またテーマ企画、コラボレーション企画ともに前回は上回った。他の学会からも高い評価があり、独創的な産学官交流深耕企画として定着している。

第 4 回 CSJ 化学フェスタは 10 月 14 日（火）～16 日（木）開催に向けて、産学官 78 名の実行委員会を編成した。

8. 教育・普及部門

平成 25 年度の教育・普及部門会議は平成 25 年 4 月 16 日、10 月 3 日の 2 回開催した。また平成 25 年 7 月 6 日、12 月 21 日に支部教育・普及担当副支部長（支部化学教育協議会委員長）を交えた拡大教育・普及部門会議を開催した。

教育・普及部門は学校教育の充実、化学の普及、会誌「化学と教育」の一層の充実を活動の 3 本柱として、「学校教育委員会」「普及・交流委員会」「化学と教育編集委員会」「化学グランプリ・オリンピック委員会」の 4 委員会で構成されている。

平成 23 年度からの公益法人への移行に合わせ、教育・普及活動のための組織変更が行われた。化学教育協議会が解消され、新たに「教育・普及部門」が設置された。ただ各支部には支部化学教育協議会が組織として機能している。支部の教育・普及活動は日本化学会の一般社会における化学の理解増進、若い世代の化学への興味を喚起する活動にとってきわめて重要であり、教育・普及部門との情報共有、連携、一体化が必要になっている。このため支部に教育・普及部門担当の副支部長を設けてはどうか、という案が打ち出され、平成 25 年度から教育・普及部門担当者がそれぞれの支部で副支部長に就くことになった。これにともない拡大教育普及部門会議を年 2 回開催、情報の共有、連携した活動が始まっている。

1) 学校教育委員会

学校教育委員会に新たに「新定番化学実験ワーキンググループ」（梶山正明委員長）、中・高等学校の教育現場で問題となっている理科、化学教科書に記載されている用語について検討す

る「化学用語検討小委員会」（渡辺正委員長）の設立準備が進んでおり、平成 26 年度にそれぞれ発足する。

①化学教育カリキュラム構築小委員会

25 年度に教科書に掲載する単元の項目を決定、今後、詰めていくこととした。

②大学入試問題検討小委員会

24 年度大学の入試問題の検討結果を「化学と教育」誌 1 月号に掲載した。

③マイクロスケール化学実験小委員会

小中学生向けにマイクロスケール実験キットを使った「わくわくときめき実験教室」を福島市こむこむ館、名取文化センター、山形大学サイタセンター（10 月）、仙台市科学館で行った。高校生を対象に国際基督教大学で高校生対象の化学実験研修「マイクロスケール実験で化学の面白さを知ろう」を行った（国際基督教大学主催、共催：マイクロスケール化学実験ワーキンググループ）。

また教員向けにはマイクロスケール化学実験の研修（教員対象）を米沢市理科研修センター主催の研修会、日本化学会東北支部主催で花巻北高校、岐阜市立東長良中学校で実施。被災地域の学校支援としてマイクロスケール実験キットを使った教員研修を行った。

2) 普及・交流委員会

普及・交流委員会は平成 25 年 7 月 2 日、10 月 2 日の 2 回開催した。普及・交流委員会には国際関係小委員会、化学だいすきクラブ小委員会、クイズショー小委員会、実験体験小委員会、化学教育フォーラム企画小委員会がある。また CSJ 化学フェスタの一般向け・小・中学生向け企画を再検討するなかで、理事会から何らかの形で継続して欲しいとの要望があった。このため普及・交流委員会で担当することとし、齊藤幸一委員長の直属グループを編成、サイエンスアゴラに参加した。25 年度はサイエンスアゴラ賞の受賞、来場者投票第 2 位の成績であった。

また楽しい化学実験を多くの子どもたちに経験してもらうため、社会福祉法人児童養護施設「光の子どもの家」で出前実験教室を開催した。

①国際関係小委員会

平成 27 年に第 6 回 NICE (6th Network of Inter-Asian Chemistry Educators) が日本で開催することになっている。このため国際関係小委員会では開催に向けた準備活動に着手、平成 27 年 7 月 29 日～30 日の 2 日間、お台場の科学未来館で開催することを決定するなど着実に計画案を実施している。

②化学だいすきクラブ小委員会

化学だいすきクラブ小委員会では中・高校生を対象とした「Newsletter」を年 3 回、小学生向けの「化学だいすきキッズ」を年 2 回、編集・発行している。さらに内容の充実を図るため、コンテンツの見直し、編集デスク 3 名体制の検討（現在 2 名体制）、Web サイト WG を設置し Web コンテンツの充実を進めている。会員拡大については入会金制度（1000 円）を廃止し、着実に入会申し込みが増えている。

また化学だいすきクラブ会員および読者層を広げるため、夏休みのイベントを開催している。25 年度は「“活躍する化学” 見学ツアー@相田化学工業（都市鉱山）」、「大学研究室への招待@阪大 平尾研」、「同@東工大 沖野研」、「10 年後の君たちの未来と化学@早大」、「化学だいすきキッズ in 早稲田」を行い、さらに新たに近畿地区で「同@京工繊大」を実施した。

③実験体験小委員会

「夢・化学-21」委員会から年間 30 万円の助成を活動資金に、出前実験教室を行っている。25 年度は 22 回実施、実験教室参加者数 1055 名が参加した。

また実験体験小委員会の活動として委員自らの出前実験だけでなく、簡単・安全・楽しい化学実験をできる教員の育成などに取り組むことも検討している。

④クイズショー小委員会

25 年度も 8 月 3 日、4 日、「夢・化学-21」委員会、日本化学会、日本化学工業協会などが主催している「夏休み子ども化学実験ショー」で「なぜナニ化学クイズショー」を 2 日間にわたって開催した。

⑤化学教育フォーラム企画小委員会

春季年会で化学教育に関係するシンポジウムを開催している。25 年度は滋賀県草津市の立命館大学びわこ・くさつキャンパスで開催された第 93 春季年会中の 3 月 24 日（日）、第 20 回化学教育フォーラム「国際バカロレアと理科教育」を行った。この成果を「化学と教育」誌平成 25 年 7 月号のヘッドラインに掲載した。

第 21 回化学教育フォーラムは名古屋大学で行われる第 94 春季年会中の 2014 年 3 月 29 日に「理科教育における産学連携の可能性」をテーマに行われた。

3) 化教誌編集委員会

25 年度に「化学と教育」誌編集委員会 3 回、編集幹事会を 6 回開催した。このほかレーダー小委員会、講座小委員会、実験の広場小委員会、産学連携小委員会、投稿小委員会を適時開催し、年間 12 号を編集・刊行している。

誌面改革、査読審査体制の厳密化と迅速化などの改革に取り組んでいる。誌面改革では表紙口絵にカラーページの創設、最近の話題などを適時掲載するなどの取り組みを行っている。また 26 年 1 月号から表紙を大幅にリニューアルした。従来は年間を通して同じデザインであったが、毎月異なるデザイン（当面は大学等の化学に関係ある象徴的な建造物）を使用する。現在まできわめて好評である。

誌面改革は「化学と教育」誌の読者拡大、結果的に教育会員の拡大につながることであり、理科教育大会などに参加、化教誌の広報を行っていくことになっている。

4) 化学グランプリ・オリンピック委員会

25 年度は化学グランプリ・オリンピック委員会全体会を平成 25 年 2 月 22 日に開催、幹事会を 1 月 18 日、6 月 14 日、9 月 27 日の 3 回開催した。

①化学グランプリ 2013

- 一次選考 2013 年 7 月 15 日、全国 61 会場で開催した。参加者数 3,492 名（参加申込者は 3,941 名）
- 二次選考 一次選考上位の 77 名を対象に 2013 年 8 月 23 日～24 日、東北大学で記述試験を実施、大賞 5 名りほか、金賞、銀賞、銅賞をそれぞれ決定した。

②第 46 回国際化学オリンピックベトナム大会代表候補選考

二次選考に進んだ高校 1、2 年生から代表候補 22 名を選抜し、強化、選抜試験によってベトナム大会代表生徒 4 名、次席生徒 3 名を決定した。

③第 45 回国際化学オリンピックロシア大会は 参加国 73 国・地域、人数 291 名で開催され、

日本代表は4名ともに銀メダルを獲得した。

9. 支部事業

学術の振興を図る事業として、支部研究発表会、講演会などを、また、化学知識の普及と人材の育成のための事業として、環境安全講習会、中学・高校生のための化学講座、全国高校化学グランプリ、出前授業、化学クラブ研究発表会などを、7支部（北海道、東北、関東、中部、近畿、中国四国、九州）でそれぞれ実施した。

10. 部会事業

コロイドおよび界面化学部会、情報化学部会、生体機能関連部会、バイオテクノロジー部会、有機結晶部会の5部会それぞれにおいて、学術の振興を図る事業として、討論会、シンポジウムなどを、また、化学知識の普及と人材の育成のための事業として、ニュースレターの発行、フォーラムの開催などを行った。

11. 化学情報センター

化学会発行図書、IUPAC 関連資料、共催・協賛の要旨集、国際会議、化学史関連資料の収集・保管を中心に、化学会編集刊行物の化学会ウェブサイトでのお知らせ、文献複写依頼対応、センター訪問者の対応を行った。

12. 収益事業（事務室賃貸）

テナント5団体（(公社)有機合成化学協会、(公社)日本雪氷学会、(一社)情報処理学会、(一社)触媒学会、英国王立化学会）への事務室の賃貸を継続中。

II. 会員の状況

会員種別	平成25年 2月末	平成25年度中								平成26年 2月末	年度内 増減
		入会内訳			退会内訳				変更 修正		
		新入会	復帰	入会計	退会	死亡	除籍	退会計			
個人正会員	21,480	436	21	457	1,449	80	1,251	2,780	1,823	20,980	-500
学生会員	5,877	2,932	2	2,934	750	1	74	825	-1,933	6,053	176
教育会員	1,703	69	0	69	125	1	46	172	108	1,708	5
名誉会員	79	2	0	2	0	2	0	2	2	81	2
法人正会員	459	10	0	10	11	0	1	12	0	457	-2
公共会員	457	3	0	3	17	0	0	17	0	443	-14

賛助 会員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	30,055	3,452	23	3,475	2,349	87	1,372	3,808	0	29,722	-333

Ⅲ. 役員 の 状 況

[平成 25 年 5 月 23 日 就 任 時]

会 長 玉尾 皓平 (理研)

副会長 尾嶋 正治 (東大放射光研) 筆頭副会長、会務部門長、職員人事担当

近藤 忠夫 (日本触媒株) 産学連携副部門長、職員人事担当

中條 善樹 (京大院工) 学術情報部門長、研究交流副部門長

西原 寛 (東大院理) 教育・普及部門長、学術情報副部門長

蜷川 洋一 (株クラレ) 産学連携副部門長、財務担当

原田 明 (阪大院理) 研究交流部門長、会務副部門長

理 事 浅川 真澄 (産総研) 石谷 治 (東工大院理工)

稲垣 由夫 (富士フイルム株) 今坂藤太郎 (九大院工)

小川 智 (岩手大副学長) 覚知 豊次 (北大院工)

加藤 昌子 (北大院理) 川上 文明 (旭化成株)

澤本 光男 (京大院工) 塩谷 光彦 (東大院理)

徳増 安則 (株島津製作所) 鍋島 達弥 (筑波大数理物質)

廣本 和彦 (昭和電工株) 増田 秀樹 (名工大副学長)

丸岡 啓二 (京大院理) 三浦 雅博 (阪大院工)

村田 道雄 (阪大院理) 八島 栄次 (名大院工)

山崎 勝義 (広島大院理)

常務理事 川島 信之 (日本化学会)

監 事 稲辺 保 (北大院理) 大寫幸一郎 (京大院総合生存学館)

澤田 嗣郎 (科学技術振興機構) 八浪 哲二 (株ダイセル)

Ⅳ. 重要な契約の締結

① Pacificchem, Inc. に係る法人登記

契約者：アメリカ化学会、カナダ化学会、日本化学会

契約締結日：2014年2月18日

内容：パッケム法人は Washington DC 法に基づき、non-stock, non-profit (charitable) である。第 617 回理事会決議に基づき、(1)パッケム法人を設立すること、(2)当会が構成 3 学会の一つとして参画することが承認され、当会から選出された役員として Board Member に就任した村井眞二氏が法人登記書類にサインをした。

② 吉野彰研究助成に関する協定書

契約者：吉野彰氏、日本化学会

契約締結日：平成 25 年 12 月 20 日

内容：吉野彰氏の寄附金を原資として日本化学会が実施する吉野彰研究助成事業を行うに当たっての条件に関する協定書を締結した。

Ⅴ. 内部統制に関する事項

内部統制に関して、次の規程を整備し、法人運営を行っている。

(1) 理事・使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制に関

する規程

- ・ 理事の職務規程：主として代表理事及び業務執行理事の職務に関する規程
 - ・ 役員報酬規程：役員報酬等の支給基準に関する規程
 - ・ 積立資産取扱い規程：寄附金を原資として設定する積立遺産の取扱い方法の規程
- (2) 理事の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制のための規程
- ・ 理事会運営規程：理事会の運営方法並びに代表理事及び業務執行理事等の職務の執行報告を理事及び監事が審議し、結果を議事録として残すこと等を定めた規程
 - ・ 情報公開規程：情報公開対象の資料の種類、保管及び閲覧等に関する規程
- (3) 損失の危険の管理に関する規程その他の体制のための規程
- ・ リスク管理規程：リスクを防止し損失の最小化を図るためのリスク管理に関する規程
- (4) 理事の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制に関する規程
- ・ 決裁規程：理事等の決裁に関する責任の範囲を明確化し、効率的な業務執行を図るための規程
 - ・ 事務局職制規程：事務局の組織、職位及び指揮命令系統に関する規程
- (5) 監事の監査が実効的に行われることを確保するための体制のための規程
- ・ 監事の職務規程：監事の職務に関する規程